

平野 貴志 師

湖の向こう岸に渡ろうと準備していたイエス様の元に、二人の相談者が訪れる。1人は聖書知識に精通した律法学者で、イエス様の弟子になりたいと頭を下げて来た。もう一人は既にイエス様に付き従っていた弟子の1人で、父の葬りの後でイエス様に従っていくこと赦してほしいと相談を持ち掛けてきた。この二人はイエス様に従いたいという共通した願いを持っていた。しかし、イエス様は彼らに厳しいことばを返された。それは、彼らがイエス様にどこまでもついていくと宣言しながら、別のものを抛り所としていたからである。

聖書はイエス様以外のものを自らの抛り所とすることは、偶像崇拜にあたることを教えている。崇拜であるがゆえに、「これがないと生きていけない」とまで考え、依存してゆく。律法学者は生活の安泰が、弟子は社会的地位（父が死ぬまで家を離れないことが息子の美德と考えられていた）が無いと生きてゆけないと信じて疑わなかったのだろう。神以外を抛り所とするものがどんな人生をたどるのか。そのことを如実に表す出来事が直後に起こる。

湖を渡ろうと舟に乗り込んだイエス様一行は、嵐に見舞われてしまう。沈まないようあたふたと動きまわる弟子たちをよそに、一人眠っている者がいた。それは先ほど枕するところもないと言われたイエス様であった。弟子たちは、「私たちは死んでしまいます」と言ってイエス様を起こした。するとイエス様は湖を叱りつけ、嵐を静められた。弟子たちは初めからイエス様を頼っていたわけではなかった。実は弟子たちの中には、元漁師が4人。舟に乗る時は彼らの操船技術を抛り所とし、彼らがいれば安心だと信じて疑わなかったのだろう。しかし彼らの力が全く通用しない嵐に見舞われ、弟子たちは絶望の淵にたたきつけられた。

聖書は神以外のものを崇拜の対象としてはならないと教えるのは、お金であれ、仕事であれ、権威であれ、能力であれ、家族であれ、必ずそこに依存と裏切りが生まれるからである。しかし神を抛り所とする者は、決して裏切られることはない。嵐を静める神の御手が私たちを覆っていると信じる時、イエス様が嵐を枕に眠られたように、どのような時にも揺るがない平安が私たちにも与えられるのである。嵐を恐れた弟子の1人であるペテロは、後に目前に迫る死刑を枕にして、眠りにつくことになる。イエス様は今日も私たちを招いておられる。「私だけがあなたの抛り所である」と。